俳諧袖珍鈔 後編 四

へ5
1128
11

5へ
巻

神珍秘論曰惑之部

古経舎黙池輯

[illegible]

芭蕉庵桃青

東華千歌仙

相撲も千歌仙

○

[illegible]

[illegible]

十論をえて新黄の角うり雪

○

道を遮

そこら道をこの二字なほ心

うき夫迄そこく春をおもひ

うらんといそこそ天ぐこれをそ

二月上旬
本園梅

[illegible]

十七日　　艾角丈

○

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の後をふてくしくまでもなくて
けく用ゐ立歟へをはて
うりくんようと日記よ
二年三年と忘れ取扱るものを
ありて次第さるのもありて
始しけるき又一年ばくえかう
や綠香等のごとくまでをもつて
しかるに忘れ奥するの
とも俗のごとくみうるさう
ひくもれとも料理をとの人
酒を飽まそれにて貧るもの
をたをけ島君を肥しむること
見中さをの連立の一節あり
自家さ又志を勉め
めおうちの俗の気味をさう
ばとれよう薄のごとくも
き客あり
の骨を掛り西りのすちをた
とり楽天の物を法し社るう

文すこの人も鉄拐郷をかうて
十の指をふさ今思も初代十の指
うるくし鉄くの性急流りをて
あり
一説通りの大坂にて金沢の
くることの推量いさし共
表三年ばかりのうちに
うりくの人の数をうるやし
面行徳岡のさ似いあるやし
くくいまさの人ていあるや
うあのの中をあるさ酒をおす
らうあのこあふらあのそれ
不思はすしくく他うりく
てありとも愛
うあやすいむうしのを食
うりやうりうまいり
二月廿八日
如水様
なを紙
〇
酒をよせ

紋和美ノ一面
四月廿四日　芭蕉

木枝桂
俊人の蒜茗て半すの
仙人ともいふべき
教を云ふく法人ともも

○

筑ノ国の約束ノ一面
隊ノ事ありさとの人ノ半別を
女ともも筑ノ我を藝者の格
ありくいひ神ノ玉形ノ
より一句ありて
号ノ半ノ事を
廉箱も木ノ
時ノ箱も
ノ一面
ノ面
もノ
仙ノ
へ御礼被すノ

ありノ一面
おノくくノ和
くノと
人ノさノ半
ありノ
ノ一面
只れいノ
へ教さ
ノ入ノ
も向ノ
ノ一面
摺餅ノ小袖
猿ノ人
する人民林
いかノ
ノ一面
中ノ人

二月十六日　芭蕉庵

一笑挨

又武士ハ教ゆるものゝ
云人ゟ
猶ゟ
只心の
の猟
り
すゝ

○

附合十七
ゟ
のみ
いつ
も
むり
いつそ
ゟ

挨ひらく六一事のそこひ甚しく
うき
成ハ
て
さる
敗しい
て二三句
俤
扱ハ成
有
て
も
卻て
化

十七体の法もしく流して何そ
な変万化の働を要求ずる而
韻ふむ句ふ及ても頃心二体をも
不ヤいね
をやくろ
人ごゝろ
只四ツ人同
そ〳〵
事遠
南〳〵
北朝〳〵

六月廿七日　文義

陸ふもの
小枝挽

〇

名月も雲
ふむ
宝めか
ると
句いく

稈の穂
狐も
めぬ〳〵
ぬい
男文

八月四日　文義

小枝挽

〇

陸士秋の
ぬ秀
ふ〳〵
十重
まて
の行
やう
気り
中
ふ

○

七月十七日

牧帝校

○

卯月廿一日

葉物とおろくの名含を物けう
をとに思服ぶよくの
おしさに二度西上人と奥ひく
しさすてさまくの
とのい旅かすくをり付の
ひとりのやとひたなきし
くん

和田平左

山菊女

みり女

あれくこうもていやもとに

○

一松茸薬店その白物出て
うさくこのれ物と直一ん
招をは菌そんよ
い服そい草そ弁経過
祝儀女式儀諸
すくる上さる人の
白ふをめるひ
今そそのの

校の招こまは
うこのより彼
ひ体こまる人
んくの山中
のの茸く
ひ設あしく
そや人毛そ
草此のも
四者くふ
文草凡非
んこうの招付
貴三四白め
のあたちめ
ふそこのる
ひさ礼とも
こ号俸賀
ひちを親
るふ俸賀
ゆのふ
教後こ

○

一もち米　一斗
一くろ豆　一斗

十月廿七日
水枝板

○

一ゆ〻孔　又ん舎
雪をメ舎の花舎と成やう
ゆ〻を侍者と枝をうつ〻
葉ハ一森ニ舞
りんひやうしき
やきもち入事

十八日
荻八枝

○

山氏月桂雪門餅
屋板松葉起別菓
餅はの様なのひまそこの松
やうちふくろうそくひまの形
ひんをもそ御祝の変化を記
しと祝ふすくん
又性薬ものそこ言ぬ契約と
菓子皆め御祝
ものとけ〻そし
黒海や黄をも
ゆやうおくく出

卜山

桃馬

廣化橋

○

此比ゟ俳舩澤の水ふえ來ると
いひふやゝ引ゆくを待つゝ
むかふ角ゟ舩と引ゆく數多ありて
及ゐうにと

廿二　仁ゝ泊

曇ゟ雪ゟ四方ゟ吹ゟ終ゟ夜ゟ

○

納松魚名物の雜煮ありに
名の外ゟ
とめゝゟ

廿三　仁ゝ泊

曇ゟ雪ゟ

○

おもひつゝ

ふとんの中ゟ
ゟ

桃馬

○

此日ゟ渡舩浮ゟ
ゟ

鈴木松塘

鈴木松塘の門人

桃馬

○

此比ゟ俳舩澤の水ふえ來ると
いひふやゝ引ゆくを待つゝ
むかふ角ゟ舩と引ゆくゟ數多ありて
及ゐうにと

廿二　仁ゝ泊

曇ゟ雪ゟ四方ゟ吹ゟ終ゟ夜ゟ

○

納松魚名物の雜煮ありに
名の外ゟ
とめゝゟ

廿三　仁ゝ泊

曇ゟ雪ゟ

○

おもひつゝ

ふとんの中ゟ
ゟ

桃馬

○

此日ゟ渡舩浮ゟ
ゟ

鈴木松塘

鈴木松塘の門人

桃馬

廣化橋

○

此比ゟ俳舩澤の水ふえ來ると
いひふやゝ引ゆくを待つゝ
むかふ角ゟ舩と引ゆくゟ數多ありて
及ゐうにと

廿二　仁ゝ泊

曇ゟ雪ゟ四方ゟ吹ゟ終ゟ夜ゟ

○

納松魚名物の雜煮ありに
名の外ゟ
とめゝゟ

廿三　仁ゝ泊

曇ゟ雪ゟ

○

おもひつゝ

ふとんの中ゟ
ゟ

桃馬

○

此日ゟ渡舩浮ゟ
ゟ

鈴木松塘

鈴木松塘の門人

桃馬

○

二白俳舩ゟ
の舩ゟ
ゟ

七

桃馬

○

鈴木松塘

筆のゟ
桃ゟ

鈴木松塘の門人

桃馬

○

二白俳舩ゟ
の舩ゟ
ゟ

七

桃馬

○

鈴木松塘

筆のゟ
桃ゟ

鈴木松塘の門人

桃馬

○

傘ゟ
ゟ

十七

晩山樓

○

傘ゟ
ゟ

十七

晩山樓

七日　三頭拍

○

彩雲一糸筆二秋油の中より
海五外と云ふ句をのぞきの俳句と
筆を走らす一帯小雪を降二夏
糸ありし
夕陽ふくて神々秋や夏の月

○

松屋風もむくと秋
お渡りし獨ぼせんくく拍
おくとりや付ふくろ
松風拍　　文政
おふくろ拍
ひよふかな夜しろ七大拍

○

ひよろん話し雨の通動雲流
古屋根く晩望下廿六角高先

二人との一軸を渡めぼきはし
一番手ひろのかり旦那勢
上洛勇神を小栗橋大坂七
十七かへ見をの約作都へ
勇るりなしとく晩期会代様
公門出て和歌も
を初ね新

廿四日

高果をん生

芳葉苑

○

さんとら風きしろ毎
手武府御ま
のの〇そ〇を
二拝の新黄昏都
乎深愛の味中
るの掃除七
おきをるの掃除
季をめのわ
修見永望五月の
月の夜七拍

[illegible]入来所作ハ

廿三日

支考ス

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きこえさせつゝ事止めさせる
まゝなる白き紙捻ひねりて
云奇文を味ふく覚えて

荊口史

○

其日も完く家事ふ忘れ
其角も一面
かれたりして夕餉の一会さ
挙て設る
皆其人々集りて
七月十一日

芭蕉

○

追而今年
清水より湧
冊出候

二六夜そろ〳〵
如来ん芳
ゐるゝ
もんく
ひ給ひ
發句の
つゝれ
ゆく
写しく

廿二日

雲耕史

○

追而
切御
なもし
その
ゆくさ
ひ申
こ候

卯月廿二日　　そ衣

風俗文

○

仲うの比弥の孫ひこ彼りうん
奴神名帳にやとてうし御霊
も久く祭ませる名社大抵大抵
通社ぬのこうて大抵大抵も
いそこ神文ふ正月ふ
字久文字の文字ぬいぬつりて
文彼んうと南まめとうさ
ひれ語りは

上才正法ふ残字
中字字ぬ字ぬ彼文彼ふ
石掘大ふ残器法ふ
打法屏風入用ふ
中山五光井の小豆もやけふ
ぬのて中山五菜て分りふ
正てもくうくうんぬ
おくてぬふ文ぬ須ぬ万人菜
ふ法飽中くり

十月九日

許六新丈

○

追手中入ぬ文ふ文ぬ
ぬの赤の猪ふくなふ
ふまぬかくすぬ丸周ふそ
正ふそふ船ふ中丸周ふ
并華ふそ文ふくふ
立付ふ中くふ卯ふ文
上のくふそ船ぬふ
他ふそふけりきふ
とん如ふふ中ふ
高中ふ二三合ふ舞り
宗ふ高り上ふふくれ
悔ふりふふ要ふつりふ
右の白ふ元ふて百額ふ
名正廿周ぬふふりふ
験ふりふ文ふ高ふ
ふくふ

廿二日

秋風文

鄒魯ふ月伯

おりふふふのけふ

花のころやそもあるうらの
（上）　そを残

○

尾と淀川本より舟にて
そのあるもの舟路
ばる文などもうつ
二ノ口　そを残

二里尾張大根のつもり
又

蔬菜すべてみな揃ひかゝり
味噌八丁味噌の名物
○

自尾刈廿二日より海
いんとそく才そめて
綿の如く一覧の
往復廿二日の
宝ちうや糖屋の
式百軒あるべ
白上ありいまの面体と
廿日　そを残

作り文

○

一桃源の白和歌山墨
花とも金もの
枝ぶりの柵
つゝあるべ
此百姓
もつゝと
停宝をふ
むさとそ
ら桃源の
一布こを
的射場

一代官来大坂貴
此つもり
笑ひ候
一郎と
不申候
事肩
く候

二月廿五日　　浜六郎左衛門

○

毎度再来之御方様へ御付ケ申上候

一　御家内様御方様へ御付ケ申上候

一　御家内様御方様へ御付ケ申上候

一　御家内様

○

の為にし

十廿二日　羽生よ

○

そもそも次郎殿参られ候ことも
もろもろ入てそ候ほどに
泊まり参候入てまいらせ候と押計候ほど
ありしまゝにまいらせ候
教訓にもなりやすく
入候て先方も見苦しからぬ
やく候ほどのことにもあらんと
もうし候ほどに
又申候

綱代民部の事急ぎ
梅の木と申候やうに
申候様にいろ〳〵
廿一日　実義

古筆よ

○

実義の儀と申候ても
よくこれらの条を
候はんさてこれらの
なにもあれかの御
候はゝ御前の御
ふさぎ候てさてまた
ようにこそ候へ
本望申候
先方も候へ
ほとときは
ひとつにまいらせ候
事

廿一日　実義

小向へ申候

○

其後は上めの
うに〳〵
事

○

花業雑史

芝蕙

一當月十六日か廿七日か未詳

松之枝

○

春見ぬ仕合のまゝ暮て行

しくれ仕合とのく秋の暮

初雪や其後ふりも仕ず

く

坂　常陸國　布引　葦田
古墳十三　多賀坂　香坂
松如坂　清瀧名坂　忘瀬坂
敷藝坂　人麿坂　通堂坂
栢原坂　越中國司遊覽坂
酒水左部君等坂　良將相坂
鮭岡之酒坂
時六ツ　琴引　鳴神　今神峠
坂七ツ　敷坂　小神峠　櫻尾峠
宇陀坂　敷坂　西の上
小雪坂　うつろ坂　不動坂
澤ノ六ツ　玉乃山　安部嶽
る舟山　てりくの峰
務尾乃山　重能乃山
式ノ橋の數川の數名もしらめ
山くいかりくく
卯月廿五日　万葉
槻本

○

のものとも十文をもしあひうろさ
えてよいかゝもあるをもとめ
て銭で考てもし
一夏の初参詣の絶切なる
一茶呑屋の油断なる
乳不一跡をくゝりつけ
一半拍高起の茶生涯分の地面
ゝゝ
一桃陵ゝゝ再会ゝゝ
除夜の珊八算ゝ
ゝゝ
元禄七年十月
一支考此夜子備撃法
ゝゝ
如斯ゝゝ

支考ゝゝ
ゝゝ命終のそうそう
て線香ゝゝ
ゝゝ

○

一二の月日記
一歳旦書初
一俳木
一新式書入
ゝゝ
ゝゝ

一文字も反古ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

○

一羽の羽音ゝゝ歳旦ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
一猪善のくち計次の句引直
一古今の序俳百人一首
ゝゝ

伊賀ゝゝ
旧所
まゝ跡ゝ

元禄七年十月ヨリ　　そを成お

○

清光と号す御硯箱にて候
拙も又右の使にて参り
山の静この時節のため
上の中ノ本にて帝王
宝の光を受しめ
影にて申もすれ共
かくの通にて自ずと
後しのしみ

十月十日　　桃青

杉尾宮古秩
新酒の酔も骨折哉

○

ゆふべ
く猫ども
あまーむーにの
ふーふこれのうち
しきのふをひきそ

むさんやの甲ぜのきりしま
代句ハ実意候てかく
句にてくれも全紙
たるやうにて
お染をおめびとう
やしおりも
出まちて一
さくやに出て
ふ

そを成

○

廿日をニへ支めて
さそくとろけよう
五あります

仮あつて爰元やみすみ
事と大きようこひとされ
あるうらまるそく人
出うくおすくく

そを成

曲あそく

○

幸福者千百萬一第分無
[illegible]
[illegible]
[illegible]

まもとくまうでてあるに、ゆきいと
深うふりたるを、
榊をもとうそうてかへるみちすがら
古松をいくらもみるにつけても
君が千とせをいはひこめてぞ
翁草かくもよはひをかさねつゝ
劔の葉刀ふるきをもちいん
雨田ゆうさ惜しからぬ
そのそのの海のよりよりおくることも
りまた又そこそこくの名所を
めぐりまゐんもおろかなることゝ
さることゝうち見をまつ
ひとりんとて伝なきみくのみとうや
お退きぬ翁なくまくまのひて
むかしくぼそのまゝをつゝ
まゐん生とまゐ事西もまゐの
くしみをいとけやとのくも
松梅ゑ桜の数をこゝろみ
年よはさを出して
勝ち先生これをいうんとうやや

丁丑のとし二月の日

薄柿舎嘯々主人拝

主人ある時の酒利とも
半海人のなる業とや
翁とくに魂を祝ぎもとめ　義

望

大松ちやう盛て待てよしくおく
ト合めるこの年ゝ名納おさそひ限
くおゝせ歌ゝて

梅

梅の文　義

はまなる入院の初ゝを
詠りめるこゝろ風流
初風や共ゝまゝとゝろ　義

二日

梅の文

古座ゝきに芹ゝやゝ市卿ゝつま
せうゝり　義

大津絵ゝうつし詠ゝ
ゝきまいゝ歌ゝ

三日

国治文

ふるき風よみけむ秋しぬ
おとらをこのゝ
梅ろる
かけとゝ西風休をよろし
秋乃
梅ろる
枯くりや侍弥の撫の松もあり
春山姫まだちつゞく妖入秋ま〳〵自
梅ろる
初茶一ぎりさゝみあくそんし
ふいちろ庵すゝむ孔教乃
梅ろる
茶出花夫
蛍の庄のさゝ福やさゝ蔵か
旅乃ゝゝ州ゝ
此菜畑のめしやゝ
上ふみそゝ
けし出初夫
雪ふゝふさ角三筋のみ

雑部カ

うえせれよりて
梅ろよ
五ぐり
姉の林檎をもらひ給ふとて
給へかし定法も生ぐ給へ姉の形
おゝ〳〵付の狩
梅ろよ
八月十七夜
十八日の月待ちとて池田の月影
下女の分ときき池田の月影
八幡の社家法師なども友多くおの設名つくれた
ゝと来給へやいすくも夜のうちて
今宵の月哉
梅ろよ
めづらしき物きのとう送りたり
けふくれ
風ひろき法師のすゝきぬきのとう
ひゞ
多勘酒やゝことなり姉の

今日八国お立ち給ふ時分より風流
又ハ吟ぜ出ようと待ち給ふ折から風流
うるわしく詠ぜられよう事の有ようも
なき事ゆへ

梅の実

五月雨おおつき殊に淋しく降くらし
一すじの人通りもなく
淋しさよ古屋をたれも葺ぬまで

かやぶきのとなりの茅も葺ぬまで

森蔵寺やどりもとめん雨の宿

あめつゝくるる方おもふ旅

五月十五日

四季寺納涼

雨と聞ば聞ながら花すゝき

雨と記ばかり花すゝき

雨降ぬさきの用意や笠と蓑

雨降ぬさきの用意や笠と蓑

梅の実

四毋ろうよ花あるせんとうけ
そゝくさくさくれいぬ後のうの事ゝ

梅の実

時おそ青山実報仏三鈔と
村井氏の家にいろいろやかく
後日の為

四ツ

蒲に伽お入拾ひ枝と形り文ようう
半透一面ゆきいろ此方一面ゆき
雪ゝ実めの後ゝ文ようう
龍神ゝ文ようう

六月ゟ

梅の実

古寺ゟ注ゝ種拾ひ
五月雨おおつ殊の淋しく降くらす
青山ゟさそゝくおもふ旅の宿

梅の実

文政ゝ未殊の外ゝ文ようう

八日

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

梅石丈　　そ我

[illegible]

十二月十四日

信濃の守殿へ

ゆき

松山に住へみやりてうそふきかへ
このやかまくらくるしくあそこの
やしきをうりはらひ

梅石丈

口上

はみやけかみそう一丁ゟ酒のくり
越入

ゆき

妻八百

ゆれ義をよ御ことまさるもそふ
そゝふおやおやめんねの雪
路味あるひ〳〵一盃遣ふとおもひ
なくまゝ而出れやてよて

十日

智恵老人

の頭ゟ一句
梅石子

南秋いきく雑の雪
う村てるう雁中菜
ふ文

横ぶえを吹ふ二人の話
坂の世ふうもんを
和出ま〳〵ふつ新茶五升
うふけやく

みちのくふのふ指北石を福禽の
沢ゟ東一里計ふあり里人ふ
ゟ此石をてゝろみ作るを
この谷ふ落し人作ふ
おりてハ下さまふなりて

小右卿後徒のおとゝ
ゆくゝふりとゝへりとゝ
ふりよ

三月二日

久八夜

昨おとゝ八時おこ風ゝ雨ゝ
たゝれりゝぬゝ雨ゝ
梅の実

三日

昨ゝ雨ゝ変気ゝ
後ゝ雨ゝ八ゝ
かみ。

三井ゝ詠ゝみゝ
ゝ私一すゝりゝ

ゆくゝそゝひゝ
御ゝ歌ゝ

春ゝ夜

茶出ゝ
御ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

その道の神に奉るのうた 月出雲

春たち二日ばかりありて 名残

松尾大社にて 梅花

めぐり来て春の一夜に咲く梅の花 名残

春雪 梅花

春雪の花散る里の風さえて 名残

雪ふかき山路の梅のうす色に 月出雲

ほのかにかをる夕暮の空 名残

雪 梅花

降る雪の中に一村遠ざかり 名残

暁ちかう雪を聞く 月出雲

梅花

月 名残

降る雪の中に一村遠ざかり 名残

二三軒みやま人家の梅つぼみ 月出雲

梅花

いとのやうなる雪うめん十あまりふさ

しけふくなどふかく 名残

梅花

大そうにやの雑煮を祝ひ 名残

梅花

山居

業師の家柏の木ある山寺 名残

猿山寺と歌ありしもの 月出雲

承安寺

梅花

名残

梅花

梅本民家を西北に見て 名残

渡水

月出雲

何をかさそはれてたちのぼる 名残

山

何やめの笠売としてたちのぼる 名残

春雪二軒遠き下駄屋哉 月出雲

う礼のかし

梅石丈　　天保

十一月廿日

雪きら〳〵馬さへ寒き朝哉

寒さ山のかをりき一すぢ出のうす

素山丈　　天保

むこ殿の新しき羽織なども折目高く

りゆうとして袴着て座敷へ通りたるを

ひやかしせんとて朋友あつまれども

も柱をうきとかゝとも立ずと

やみぬ

廿日

左右馬　　天保

はかなくも雪と降ける事うたてさく

もらおく哉

梅石丈　　天保

そ後てんうくら殿と

敷へ出来次第うた

ふとく梅せんさくらいそきふゝく

うさひ〳〵もゝ〳〵花又桜そみ〳〵

二月廿日

梅史　　天保

かゝるきぬ〳〵待るゝそるをまつ

ふゝしあるさくへもろ〳〵教乃

梅石丈　　天保

いと

雪ほのかに八ツ半さ頃雪ふれり

ふゝせのうす

文八　　天保

好る雪前の雪存てうかゝもく

うかゞう

梅石丈　　天保

春山吟日陰のやさしき教へ哉

ふゝうゆのうす

梅石丈　　天保

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひさるさよをさくらばの
湯浴を許す。第千號一メ初もろを祀
こゝ初春海へ出でゝ初日を拝むべく
互にまろく祝ひ
梅石史
そ廿弦
さゝ波ぐ初日をひゝみ茶わこを一つと
ゝり出す源初ゝ波初名乃
ゝる
青山史
そ廿弦
大井こゝさゝとゝ汐ゝこゝ青ゝ村名
れよろゝゝう作ゝ
梅石史
そ廿弦
ゆさゝ八十ゝ笑笑とゝそ栗めゝ
一こゝ茶ろけとゝ初ゝ送ゝ海ゝ
ゝ礼申ゝ
九月廿五日
おこゝのとゝのゝゝ日つけゝれ見れ

文ゝゝ一初ゝゝ一ゝゝ
ゝゝと
梅石史
そ廿弦
ゝりゝ
春平ゝゝさの本ゝ
めの笑ゝゝ
梅石史
そ廿弦
笑ゝ本ゝゝ大松ゝ
笑ゝ初ゝゝ
梅石史
そ廿弦
ゝゝ
伊ゝ命夜ゝゝ的ゝ
の投ゝゝ一ゝ
ゝゝゝ笑ゝ
梅石史
そ廿弦
新茶を井茶ゝ
ゝゝ送ゝゝ
ゝ
ゝ月廿五日

梅石丈

いと

ゆるやかな法事お海一服くさ弟と

池向け社会お昭味ごまんうるしち

さくおくうもくひと祝う

いる

梅石丈

いと

さうくそあもの此てキうそそう

ゆくそそくうそその歌つ

そ芸成

そ芸成

名法くまえ説とう

法そ句くく変我し一句をや

未破感句やくく

そ芸成

そ芸成

那とまえ弟う句二すうをくせや

そ芸成

そうくそそくそ方うお御よう歌

あう句く弟八法法みくお歌をく

梅石丈

そ芸成

むくく句法之さりうへくやうて

方史へろくく歌ちく

そ芸成

きけくをう機よくする山脇お

又百部句句句大板へう事と歌

句うく時う私本う一同句方ら

法とは中歌つ

そ芸成

いる

乙村民うるひくくとも指つ

くくう法うる図成へまく比

おいてこの

そ芸成

いと

尾そを八歌うう法くて今句

歌つく

梅石丈

句句八法山く安状度を殺しセ

ま弟く法八仙林坊くもめん表

くく此そうを歌つ

梅花文

俳句四人集和歌一首あり中四お後の後の後の
る男なり

そ其成

万吉屋にてさめ井あり
武蔵なるものゝ一首
ひとつ

梅花文

そ其成

その形の松に似たる木
枯れうるをあるを松く
なし〳〵思はれうる

椎の〳〵自生安松のみとおかそ其成

一昨日八面根雲清うる迄まく
後く花卯の中梅方へ参ともあれ
ふ〳〵中孤なる八百まくく海
清なる山の若の花妙見へ八う卿う
安国出張ヶ入〳〵

梅花文

そ其成

う

言山うまる山うる梅うと
へのまうる歌つ

梅花文

そ其成

寺入院的保うる社うう
ふ〳〵う高城教つ

五月十三日

いと

山う社く安う八百まく海う
ま八清あまうて出雲
梅花文

そ其成

ちやとのうる流
をうとと歌つ
ふ〳〵城ふ

いと

的保う八一年の杉と
うふう仔のあ〳〵

梅石丈

ちまたにを務まんちうみ
ゐうら因或へもろしく教つ

梅石丈

ふとくとのせんさくいそ
かさひ〳〵をそ教そみ〳〵

二月廿日

梅くの

いと

茶屋十七つ所々ゑ
近ト〳〵ゟ松る送つの
宮ちをの梅〳〵

四月廿日

未夜久ちつ夜

梅くの

いと

七湖ち梅人いうつ
痛おも梅〳〵ゟ
みる

梅石丈

浄七寺入滝次度時ゟ一ゑの〳〵
ゑ門時ゟ静ゟ渡れの〳〵川

二ゟ

孤石丈

昭教ゟ〳〵大雪見ゟ
延引の〳〵梅ちそ雪
う入来給つ

十一日

ま山丈

いと

久八梅つをそくあみ
八梅つのや梅みあみ
うち

く

ゟちをおゟ〳〵只今ゟ
教つ

梅石丈

又

給そ一筋そのかゝり一人ゟ

ゟ

梅石丈

こ

ゟ

ゟ

ゟ

雪切等をきうゃくるる十字ぬまい
うつさうを以て教ゝ

そせん

海水杉形原的ら降うる赤と赤如
砂

梅石丈

そせん

等栄いそう〳〵く存〳〵的落るもち
活きう能〳〵出来次第教ゝ

梅石丈

そせん

橋等待るるをくるめ
めるく肉く糸りのよるを活てつけ迄
出よう〳〵くる生〳〵此版教ゝ

十丸

梅石丈

そせん

返事

水苗めのるう易も画てのよ〳〵

青水丈

そせん

いも既七ツそう以今うこ〳〵教ゝ

そせん

海ちう七ツあゝよう
ミえうこ〳〵教ゝ

そせん

清水の乱御来よう神
日う新しをの中と若名
う来うるの出前く
うるかさ我を歩んふ教為
吟の物う〳〵旅行致び切る袋に
ぬいのもこまる山海うに
来よう出ゝ教ゝ

八月十日

そせん

知海坊

そせん

夜の景趣しそう新
さ泳吟うて来出迄
く

ある

久八義る神ゆえ人をうけ引取
しやくをする

カる

梅石文ルト

〃

きこゆ義分第一る酒おしまぬ
のうけ取ル

大雲ち納ル

天保戌

智光和尚き彩色の尺のよう
なるうしやくをする

天保戌

ニカうの村ニへまいりこうつ着て
よう一服ニひりこうつさ
時のあいさつをうけ取て帰
ル

天保戌

妙安寺藤紋の馬入やくとを請の
形ちろうそくニ立ふさ

式残ニそ次ゆうぬいろうそく
此おさ角行せうとうとうしやく
栄ゆうしのまうふ多のう

カ月ニる

茶話菴ちくるそおぬ物うか
しのの名物ニ付ありされ

十六文ニうぬ

八文ちゃうもうニ教ル

天保戌

栗一おぬ風呂ニより送ニ下着
ようニうれ教ル

天保戌

おうニしい十束めつし
後よろしくれ教ル

天保戌

久ち引姫おうしの後村へ帰ル
中永一服ニの行ようろしく教
ル

天保戌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

梅石主

以上

村井古道ふるき友なれば
多代の歌のうちに
梅ぞそれ

宗牧

雪折の名ある松もあるものを
なり
雅なる

宗牧

以上

歳暮
歳暮と人突線とてまんちう一首
行くとしは一筋ごとけるなり

宗牧